

奥村三雄編 『平家正節語彙索引一節ハカセ付語彙集成一』

添田，建治郎
山口大学人文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11990>

出版情報：語文研究. 61, pp.70-72, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

△紹介▽

奥村三雄編『平家正節語彙索引——節ハカセ付き語彙集成』

添 田 建 治 郎

本書は、早く平家正節刊行会から出された『平家正節』(大学堂書店 昭和49年)、いわゆる尾崎本平家正節の「本文編」や、渥美かを

る・奥村三雄編『平家正節の研究』(同右 昭和55年)「研究編」の後を受けて作られたもので、「索引編」に相当する著作である。本書全体の内容は、一言でいえば、「節ハカセ付き主要語彙集成」といった性格をもち、尾崎本平家正節を主な対象として、本文中で節ハカセの施された語例の検索をめざしている。冒頭の「はしがき」には、

「(計画されている)尾崎本平家正節の本格的な索引編の、その第一冊目に宛てる意味合いで上梓された」事情が述べてある。すでに出版済みの尾崎本平家正節の本文と、それに関する金田一春彦氏をはじめとした諸氏の一連の研究、続く編者奥村氏御自身の労作『平曲譜本の研究』(桜楓社 昭和56年)、以上が、平曲譜本の研究、国語

史の研究(なかなんなく中世末〜近世期のアクセントの歴史的研究)に寄与した功績は、量り知れなく大きいものがあつた。かく言う紹介者など、『平曲譜本の研究』第二編「平曲譜本の国語学的研究」の

記述と、そこに付された「発音注記例一覧」(635〜677頁)にはこと

のほかお世話になり、購入以来手垢で汚れることの最も多い本である。

中世〜近世期京都アクセントの実態・体系の把握(山^ト上^ト×(971ロ・く)に) 仏^ト上^ト×(7234白・く)に) みる、低音連続型からの語頭隆起の事実など)にあたっては、すぐにこれを紐といて活用し、音韻史の研究の際にも、また国語学演習用の準備にあたっては、例えば、ヤ行ウ段拗長音の存在を示すiu連母音の割ル注記、語末の促音を示す詰メル注記、特定の語についての清ム注記(六代勝事記の「事」の読み方、タ行連声現象、バ行音の半濁音符など、実際の平曲譜本の譜記例を求める際、くり返し利用させていただいている。

渥美氏亡きいま、「索引編」を切望する声が、共同研究者だった奥村氏のもとへ届いたとしても、理の当然ではないだろうか。本書は同時に、編者の旧著『平曲譜本の研究』に対しては「資料編」的な意義をもたせて、そこでの記述の根拠となる資料を明らかにし、著者の責めをも果たそうとする。本書は、「節ハカセ付き主要語彙集成」

をめざしたもののゆえ、重複を避けて右「発音注記例」を再録することとはしていない。

さて、本書の内容を縷々紹介して、読者の存分の活用をお薦めしたいと思う。まず、体裁は左の通りである。

はしがき

第一部 平家正節・節ハカセ付き主要語彙集成

第二部 平家正節・平家物語詞章対照表

第一部の「平家正節・節ハカセ付き主要語彙集成」(1~306頁)の作成方針に関わる特徴を、主なものについて私に列挙してみる。

(1)尾崎本平家正節を中心資料として、その本文中に節ハカセが施された語をアイウエオ順に整理し配列する。

(2)掲げた各語例には、具体的に節ハカセを付す。

(3)付属語を伴う場合は文節形まで、複合語については前後部要素も明らかにして掲載する。

(4)動詞・形容詞・助動詞などの活用語は終止形を見出し語として掲げ、各活用形は、それらのアクセント面を考慮した(A)~(L) (a)~(l)の十二形(本書305~306頁に具体的に内訳を示してある。)に分けて示している。

(5)各語例には、それぞれの語られる曲節名を注記する。

(6)譜記例としては、東京大学青洲文庫本平家正節、京都大学平曲正節、東京教育大学本節付平家物語をも参考資料に載せるが、それは、中世末~近世期の京都アクセントが反映しているとみ

た場合の、尾崎本平家正節記載譜記における当否確認の意味をこめた比較が目的となっている。

(7)単位語や見出し語の決定には、氏の文法観・アクセント観がはっきりと打ち出されている。例えば、

。「此ハ」例も多い平家正節では、「此ノ其ノ」を連体詞として扱わず、「此」を一語と認定する。

。付属語は、そのアクセントを自立語と切り離して独自に考えることが無意味なゆえ、すべて文節形で示す。

これらの特徴は、本書が、「尾崎本平家正節に対する『索引編』の第一冊に宛てる」という条件の中でも、有効に活用されるように、可能なかぎりの合理性を追求した編者「苦心の配慮」になるものである。この行き届いた「気配り」に心える意味で、読者は、「平家正節・節ハカセ付き主要語彙集成」の末尾に示された「説明」(304~309頁)には十分目を通し、その上で、当面求めるべき譜記例を検索してゆくようでありたい。本書の活用例を一、二あげておこう。

いずれも『平曲譜本の研究』のよく明らかにするところであるが、まず、尾崎本平家正節に反映したアクセント体系を把握すれば、中世~近世期の京都アクセントがたどった変化の道筋を知ることができる。また、個別的な語形変化の時期を考える具体的資料も提供する。例えば、「咽喉」(1643指)、「御身」×上コ(302ロ・くなり)の譜記例によって、「ノムド」ノド「オホーム」オン」の変化を、中世半ば頃(南北朝~室町初期頃)以前に起きたと考える、等々。

アクセント史を明らかにするにとどまらず、広い射程をもった活用道がひらけているはずである。なお、「主要語彙」の名は、掲載す

る見出し語を――三拍語に限定したことによる。『平曲譜本の研究』の「資料編」的な意義ももつ、といわれる所以か。この方法でも、「それぞれの構成素に該当する見出し語の項で注記としてとり上げられる事が多」いゆえ、結果として、四拍以上の語（「阿弥陀仏」「立ち入る」「口措し」など。）もその多数が掲載されることになる。ただ一部には、「まなじり（康頼祝詞）」「あらはす（禿童）」「あまねし（禿童）」など、未掲載の語も若干例ないわけではない。四座講式（金田一春彦氏の『四座講式の研究』（三省堂 昭和39年）所収『四座講式』で墨譜を施されている語彙総覧）や補忘記に反映したアクセント、それらとの比較、変化のありように興味をもつ向きには、あれば一層有難かったと思う。

第二部の「平家正節・平家物語詞章対照表」（311〜319頁）は、岩波古典文学大系本平家物語の詞章と尾崎本平家正節、両者の頁数の対応関係を示したものである。私（紹介者）のような、金田一春彦氏等編の『平家物語総索引』（学習研究社 昭和48年）や、同じ年に出版されて偶然書名も同じになった笠栄治氏編の総索引を仲立ちとして、右三本（四本）を机上に広げての語例の検索に音をあげていた者などには、その膨大な時間の浪費から解放されて重宝この上ない。

本書が、中世〜近世期の国語史（音韻、アクセント、語彙等々）研究に縦横に活用されること、疑いない。志を半ばに逝かれた渥美氏の思いは奥村氏によって受け継がれ、ここに国語学上の貴重な成果として実ったわけである。さらに「尾崎本平家正節総索引」へと発展していく日も、そう遠い先のことであるまいと思う。この紹介の筆が、本書『平家正節語彙索引』で編者の真に意図したところ、

意義を、迂闊にも見過してはいるのではないか、と危惧する。

（昭和58年2月 大学堂書店発行 八八〇〇円）